

## 「文学散歩」と都市の記憶

——本郷・無縁坂をめぐる言説史研究——

渡辺 裕

### 〇 はじめに

『記憶の場』が一九九〇年代にフランスで刊行され、歴史学に大きな衝撃を与えて以来、「記憶」は様々な学問分野でホットなトピックとなっている。われわれがあたかも直接的に与えられるものであるかのように思っていた、あらゆる知識や認識が、実は集合的記憶の媒介を経たものであり、そのことによってまさにリアリティをもって立ち現れるのだという基本的な考え方にたつならば、その意義はいくら強調してもしすぎることはないだろう。

しかしながらこの種の議論が、「記憶」という一見新しい語を使っているだけで、今ひとつ新味に欠けたワンパターンの議論に終わっているケースが多いこともまた事実である。また、記憶の形成に関わる様々な要素やあり方を考えるならば、芸術研究がこのような議論にコミットする機会も多いはずなのだが、これまでに出てくるのは国歌や記念碑など、どちらかといえば断片的なものにとどまっており、その扱ひも表現の内実との関わりを欠いた表層的なものにとどまっていることが多いように思われる。これまでその種の議論に芸術研究をうまくのせてゆくことができなかった原因はどこにあるのだろうか。もちろん記憶をめぐる議論が、国家イデオロギーの無意識的なすりこみというような政治的なテーマにいささか偏

する形で展開されてきた経緯も原因のひとつだろうが、大きな原因は、これまでの芸術研究が蓄積してきた芸術の内実に関わる議論と、歴史学者などが中心になって作り上げてきた記憶に関する問題系とをうまくすりあわせ、両者をつなげてゆくことができなかったことにあるのではないだろうか。

実際、歴史学者や社会学者の場合に、芸術的内容的な考察や議論の蓄積が必ずしも豊富でないことを考えるならば、多様な作品を前にした具体的な議論の局面になってしまうと、どうしてもなかなか立ち入ることができず、比較的表面的なところで議論できるようなものだけを取り上げることになるというのは、ある意味では当然のことである。

他方、芸術研究の側も、この「記憶」というテーマにうまく対応する観点をもちえなかった。芸術研究は長いこと、作者や作品に焦点をあわせ、最終的にそこに着地させることを前提とする形で研究の歴史を作ってきたから、どうしても「芸術そのもの」の側に偏した議論になりがちである。「都市と芸術」というようなテーマを掲げた研究は、今日では決して少なくないのだが、その種の議論の多くは、作品というテクストをメインに据え、都市に対しては、その背景、コンテクストとしての副次的な位置しか与えてこなかったから、せっかく都市との関係についての議論が多様な要素を取り込んだとしても、最終的には芸術の「内輪」の話に回収されるようなものにとどまりがちであった。それゆえ、それを記憶の問題として展開させる場合も、作品の記憶や作者の表象といった話にはなりえても、それを都市の表象や記憶の側からの統一視点をもちて考えるような回路を欠いていたと言うべきであろう。その結果、芸術や芸術作品という問題系と、町並みや都市空間の表象という問題系とは、常にどちらか一方が背景的・副次的な位置へと退いてしまう関係になってしまい、両者が相互に関わり合いながら、それを通じてそれぞれが変容してゆくといったダイナミズムを捉えることはほとんどなされてこなかったと言ってもよい。

だが記憶の問題は、具体的な場面に立ち入って、そのようなダイナミズムを正面から捉えてゆくことなしには実質をもちえない。記憶に関わる問題系にはいろいろな要素が含まれており、それを一括りに「記憶」と呼んだだけでは何も明らかに

なったことにはならない。重要なことは、「記憶」という概念を振り回すことであるよりは、われわれが現実的な事物について知り、認識する過程で芸術作品やその解釈がどのような形で関与し、どのようなメカニズムのもとにその表象が形成されてゆくのか、そしてそれがどのように伝承されてゆくのかということを、具体的なプロセスに立ち入ってみてゆくことでなければならぬ。

本論で問題にするのは、都市（より一般的には場所）に関わる記憶の問題であるが、ある都市（場所）に関するわれわれの表象が形作られ際に、芸術作品やそれに関わる解釈や言説がそこに関与し、人々に何かを想起させたり、何らかの印象を刻み込んだりする役割を果たす、そのメカニズムを明らかにすることが重要なのであり、そのことがまさに記憶という問題系に芸術研究のこれまでの蓄積を接続させてゆくということの内実なのである。

このような状況を芸術研究の側から打開するために、われわれは「逆転の発想」から出発してみることにしようと思う。それは、芸術作品と都市との関係を考える際に当然の前提としてきた、作品というテキストに対するコンテキストとしての都市という考え方をいったん棚上げにして、都市というテキストに対するコンテキストとして芸術作品を位置づけるような考え方から出発してみようという発想である。この考え方は、ビートルズの生まれ育った街リヴァプールの音楽文化を研究しているポピュラー音楽研究者サラ・コーエンの言い方を借りたものである（Cohes 1997）。コーエンの論文は、炭鉱の閉山によって斜陽化しかかっていたリヴァプールが、観光資源としてのビートルズに着目し、一種の町おこしとして、生家や録音スタジオなどの「ビートルズ遺跡」をまわるコースを設定するなどして、観光客の誘致をはかった政策を検証するものだが、彼女はこのコースにそって街を歩くと、いたるところでビートルズの音楽が聞こえてくることなどを紹介しながら、このようにしてリヴァプールの街をまわる体験は、リヴァプールの街というテキストを、ビートルズの生涯や活動、その音楽といったコンテキストとともに体験し、を通してリヴァプールという街の表象を形作ることだと考えた。ビートルズの音楽というテキストを生み出すコンテキストとしてのリヴァプールという通常の考え方を逆転させることによって、芸術と

都市との関係の焦点を芸術から都市の方に鮮やかに切り替えた逆転の発想といえるだろう。

もちろんそのことは、作品自体はどうでもよいとか、作品解釈などの従来の芸術研究が積み上げてきた蓄積は不要だなどということの意味するわけではない。重要なのは、芸術を巡る議論が、ともするとすべてのベクトルが内向きに作品に収斂してゆくようなことになりがちであった中で、芸術が、現実社会に関わるわれわれの表象や記憶を作り上げたり動かしたりする、その外向きの力のありようを「外」の側に焦点を合わせることによってきちんと捉えることなのである。そのためには、芸術作品と都市との関係を、一方向的なものではなく相互的なものと捉え、両者が互いに呼応しながら無限に変容を積み重ねてゆくようなモデルで考える必要がある。作品も都市もそのようなプロセスを自らのうちに記憶として堆積させてゆくことによって奥行きを作り出してゆくのであり、そこで両者が関わり合うメカニズムや、そこで進行する具体的なプロセスにまで立ち入って、そのダイナミズムを捉えることこそ重要なのである。

都市の表象や記憶と芸術との関係をめぐる従来の議論の問題点は、作品解釈や芸術の世界内部の言説がそこに関与するメカニズムをきちんと捉えることができなかったために議論が表層的に流れ、貧困化していたことにあるのであって、都市の表象の方に焦点を合わせて論じること自体が悪いわけではない。コンテキストとしての芸術作品がテキストとしての都市の表象に関わり、それを活性化させるメカニズムが解明されれば、そのことはまた、今度は逆にその都市表象の方がコンテキストとなって、テキストとしての芸術作品の解釈に関わり、それを活性化させることにもなり、そのような相互作用の連鎖が生み出されてゆくことになるだろう。

そのためにここでは、文学散歩という営みをとあげ、その一端を解明してみたいと思う。言うまでもなく、文学散歩とは、作品の舞台となった土地や、作家の活動した場所を訪ねて歩く行為であるが、従来その意義が十分に評価されてきたとは言いがたい。本論でも後に取り上げる前田愛の『幻景の街』の小学館ライブラリー版につけられた解説の中で小森陽一はこの本について、「理論編としての『都市空間のなかの文学』に比して、『文学の街』の方は、ただの文学散歩じゃないか、と

低く見られるむきもあ」ったことを述べている(二七八)。作品というテキストが最終的な審級として存在し、都市の方はそれに付随する副次的なテキストにすぎないならば、文学散歩はせいぜい、背景を知ることによって作品の味わいを増す程度のものだということになる。しかしながら、作品と都市の相互作用のメカニズムを明らかにしようというわれわれの立場からするならば、文学散歩は、作品を現実の都市と結びつけ、重ね合わせる体験のできる貴重な場であり、そこにおいて作品がコンテキストとして都市というテキストの表象を豊かに作り上げてゆくと同時に、今度はその体験が作品の側にも投げ返され、その表象を変えてゆくというダイナミックな関係が、まさに生み出される場にほかならない。そのあり方を具体的な歴史相の中で捉えてゆくことによって、芸術作品が都市の記憶の形成に関与するメカニズムを最も端的に示すことができるのではないだろうか。別の言い方をするならば文学散歩は、文学作品という背景との関わりの中で都市の表象を作り出し、また都市という背景との関わりの中で作品の表象を作り出すことによって、それらをわれわれの記憶に刻み込んでゆく触媒装置として機能しているのである。

## 一 文学散歩の創始者としての野田宇太郎

文学散歩の創始者と言われるのは、文芸評論家の野田宇太郎(一九〇九―八四)である。野田は一九五一年に『日本読書新聞』に連載した「新東京文学散歩」に大幅に増補改訂を加え、単行本として刊行した(文献1)以下、書誌事項は巻末の「無縁坂文学散歩関係文献」に記載した当該文献番号を参照のこと。これが大当たりしたのをきっかけに、九州文学散歩(一九五三)など、単発の企画を次々とたてるのみならず、そのシリーズ化をはかり、一九五八年の『東京文学散歩』(小山書店新社、三巻刊行、文献8)、一九六二年の『定本文学散歩全集』(雪華社、全一三巻、文献9)、一九七七年の『野田宇太郎文学散歩』(文一総合出版、全一四巻、別巻四、未完、文献18)など、再三にわたって「全集」刊行を試みた。とりわけ

東京に関しては、文庫版の『東京文学散歩の手帖』（的場書房、一九五四、文献4）、写真中心の『アルバム東京文学散歩』（創元社、一九五四、文献3）、『改稿東京文学散歩』（山と溪谷社、一九七二）など、様々なヴァージョンを出しており、そのたびに再調査して改稿の手を加えるなど、この「文学散歩」をライフワークとするような活動を展開した。

また、「文学散歩友の会」を創始し、一九六一年にその機関誌もかねて雑誌『文学散歩』を創刊した（『文学散歩』一九六一）。この雑誌をみると、各地の支部で行われている活発な活動が紹介されており、文学散歩が大きなブームとなった状況がうかがい知ることができる。

野田が文学散歩をはじめた意図はどのようなものだったのか。最初の著作『新東京文学散歩』の序文には、これは「足で書く近代文学史」であると書かれている。焼け跡の東京を漫然と歩いているうちに、一つの事跡は他の事跡につながり、近代文学史の形に似てきたと彼は言う（一一二）。これまでわれわれはともすると作品だけで芸術を評価しがちであったが、まずは人間を知ること、そのために自然や環境、私生活を理解することが必要である。多くの作家は東京を場として活動していたから、東京を知ることこそは近代文学の真実に触れることだ、と彼は言うのである。それにもかかわらず、彼らの活動の痕跡は、東京が戦災で焼け、さらに戦後復興の名の下にすさまじい破壊が進む中で急速に姿を消そうとしている。それを少しでも跡づけ、記録することこそ自らの役割だというのが野田の認識であった。その限りでは野田の考えていた文学散歩は、都市自体をテキストとして読むというよりは、作品や作者のコンテキストとしての都市を歩くという色彩が濃厚であった。しかし、野田に触発されて出た文学散歩本の中には、あえて「文学散歩」ではなく、「文学に描かれた東京によって東京の風景の変遷をたどる」ことをうたった樋田満文の『文学東京案内』（文献6）のように都市の側に力点をおいた著作もあるなど、文学散歩はまもなく、野田が考えた以上の広がりを見せるようになるのである。以下本論では、森鷗外の《雁》の舞台となった東京・本郷の無縁坂を事例として、文学散歩のガイドブックや都内の散歩コース紹介などにみられる無縁坂に関わる記述の変化を追いながら、文学散歩という行為を支点にして、この土地の表象と《雁》という作品の表象がどのよ

うに結びつきながら変化してきたかを具体的に跡づけてみることにしよう。

## 二 野田宇太郎とその影響

野田宇太郎の最初の著作『新東京文学散歩』（文献1）の中に無縁坂はさっそく登場する。野田が「文学散歩」を提唱し、精力的な活動を展開する以前には、無縁坂という場所が特にこの作品との関連で取り上げられるケースは全くなかった。『大正の東京と江戸』（青山霞村編 一九一六）や『新版大東京案内』（今和次郎編 一九二九）、『大東京の魅力』（青山光太郎編著 一九三六）といった戦前の東京案内には、名所旧跡の類がかなりいろいろのせられているが、無縁坂はもとより、文学作品の舞台になった場所や作家にまつわる旧跡などに関わる記載はほかにもほとんどない。私が見た中で唯一、無縁坂の名が登場するのは、明治四〇年に東京市が編纂した「東京案内」の「湯島両門町」の項目であるが、「本町と龍岡町との間に無縁坂あり」（三五八）と記載されているだけである。もっとも、これは《雁》が発表されるよりも前に出ているので、《雁》への言及がないのは当然のことである。

この『新東京文学散歩』での《雁》に関する野田の記述は、ここが作品の舞台であることを示すだけのごく簡単なもので、作品の内実に踏み込むこともほとんどないが（二八―三三）、野田はその後、同種の本を何度も出し直しており、その過程で記述が詳しくなるとともに、作品の内容との関連を深めてゆく。言うまでもなく、無縁坂には主人公のお玉が高利貸の末造にかこわれて住んでいた家があり、そこを散歩コースにしていた帝大生岡田と出会って思いを寄せるようになるという設定になっているが、野田の最初のヴァージョンではその向かい側にある旧岩崎邸の鬱蒼とした木立と塀についての記述があっただけなのに対し、翌一九五二年に角川文庫で出た増補改訂版（文献2）では、「お玉はその坂の中途の岩崎邸の向かい側のしもた家の妾宅にかこわれていた」（三一）という記述が加わり、さらに一九五四年の『アルバム東京文学散歩』（文献

3)には「無縁坂には今でもお玉さんの住んだやうな家がある」という表現が登場する。また、この『アルバム東京文学散歩』はその名の通り、多くの写真を含んでおり、その「お玉さんの住んだやうな家」の写真が視覚的に提供されることにより、舞台としてのリアリティは格段に増している。この路線は翌年の角川写真文庫『東京文学散歩山の手篇』（文献5）においてさらに顕著になる。「…そのあたりから、美しいお玉さんが、ふと出てくるような感じがする。それほど無縁坂は《雁》に描かれている頃の面影を今もはっきり止めている」という記述とともに、添えられた写真には「《雁》のお玉が住んだ無縁坂。右は鷗外の描いている岩崎邸の木立で、この感じは、『雁』の頃とほとんど同じである」というキャプションがつけられ、鬱蒼とした岩崎邸の目陰にひっそりと立ち並ぶ家々の雰囲気を取り豊かに伝えている。

野田はその後、一九五八年の『東京文学散歩 下町 中巻』（文献8）では新たな取材をもとに全く新しい内容のものを書き、その記述は基本的には、彼の最後の仕事となった一九七九年の全集（文献18）にまで引き継がれてゆくことになるのだが、それは無縁坂単独の記述ではなく、不忍池に飛来する水鳥の描写から始まり、そこから無縁坂へと上がってゆくルートをたどりながら、そこに巧みにストーリーを重ね合わせてゆくものである（一五九―一六六）。《雁》は、いくつもの偶然の重なりが、お玉が思いを寄せる相手であった帝大生岡田との関係をすれ違いに終わらせる設定になっている。不忍池で投げた石がたまたま一羽の雁に当たり、殺してしまったために、岡田はその雁を外套の下に隠して友人達と大声で話しながら、無縁坂を大急ぎで通り過ぎてしまい、今日こそと渾身の覚悟で待ち受けていたお玉に気づくこともなく、その関係はすれ違いに終わることになる。野田は

「このお玉は、明治の社会にまだ根強くのこっていた封建的な因習から、恋愛という美と自由の翼によって抜け出ようとしながら、ついにはたし得なかつた不幸な女性の典型ともみることができよう。その運命が、不忍池の不幸な雁によって象徴されている」（一六一）

としているが、『国文学 解釈と鑑賞』一九五九年八月号の鷗外特集所収の坂本浩の論考「《雁》の系譜」にも類似の解釈がみられることからみて、野田のこの記述は、当時の国文学研究でのこの作品の一般的理解をふまえたものとみられよう。

「《雁》は、だから不忍池の文学だ、と思いつながら、私は鷗外がお玉の家の場所として《雁》の中に設定した無縁坂へ足を向けた。それはそのまま…《雁》の最後の三章を髣髴させる道筋でもある」（二六三）

とした上で、野田は無縁坂の街並みを、岩崎邸の木立に遮られていつも「日陰になっている」「狭いさみしい町」として描き出している。無縁坂の薄暗い街並みには、このようにして小説に描かれたストーリーという背景的なコンテクストが与えられ、一つの意味づけがなされるのである。

このような野田の「無縁坂」表象は、その後の多くの文学散歩ガイド本で繰り返し提示されることによって、この場所に関わる人々の記憶を形作ってゆくことになる。

「本郷三丁目から切通しの坂を下りてゆくと、電車通りの左側は岩崎邸の塀ですが、邸の裏側の道は、森鷗外の小説《雁》のヒロインお玉が住んでいたという無縁坂です。現在でも、まだお玉が暮らしていそうな古い「しもたや」が二軒残っています」（樋田満文、文献12、一三九）

「その無縁坂にかかる左手の格子造りの家並は、《雁》の女主人公お玉さんの生活をしのばせるのに十分な雰囲気を持たせてわずかに二軒ほど残っている」（江幡潤、文献15、八三）

といった具合に、この頃までこの坂に残っていた家は、「お玉の住んだ家」として繰り返し描かれた。野田の提唱した文学散歩が全国的な広がりをみせ、各地に文学散歩の同人団体ができると、そのような表象はますます威力を発揮する。森まゆみが、かつてのそのような家が建っていたあたりに住んでいる人に話をきいたところ、次のように答えたという。

「どうしてあの風情のある家を壊したの、もったいないと皆さんおっしゃいますが、あのころはまあ、私たち家族はパンドミたいでした。休みの日になると文学散歩の団体が来て、『これは可哀想なお玉さんの家です』と大声で説明する方もあるし、『お玉さんの子孫はいるかな』なんてのぞく人はいるし。いるわけがないじゃないですか。うちの先祖に妾奉公した者はおりません。それで建て替えるとき、できるだけ平凡な目立たない家に変えたんです」(文献28、三二五)

その人の家は明治の頃から、たしかに小説に出てくるそのままのような家に住んでおり、小説に出てくるとおり、隣は裁縫学校だったとのことで、当時まだ若くて美しかったその人の祖母が出入りするのを、あるいは鷗外が通りすがりにみて想像力を働かせたのかもしれない、と語ったという。虚構と現実とが微妙に重なり合う中で、現実の情景を投影することによって小説が生きたものになる。他方で現実の風景もまた小説に描かれた情景と重なりあい、想像力をふくらまされることによって意味づけられる、テキストとコンテキストとの相互関係の機微がここにはあらわれていよう。二〇〇三年に出た観光ガイドブック『るるぶ情報版 東京を歩こう』(文献34)に「文人ゆかりの坂と路地をつないで」という名で掲載されている散歩コースの解説には「お玉が住んでいた無縁坂の家は、三〇年ほど前まではそのままの佇まいで残っていたという」(六六)と書かれている。フィクションであるとはわかっているはずなのに、思わずそれがあたかも現実の過去であり、歴史であるかのように理解してしまう人々の心性の傾きをまのあたりにするとき、小説が単なる虚構の世界をこえて、現実の都市やその歴史についてのわれわれの表象の欠かせない要素となっていることをあらためて感じさせられる。

他方、野田が不忍池と無縁坂をつなぐ散歩コースにしのびこませた、池にいる雁の運命にお玉の運命を重ね合わせた解釈もまた、多くの文学散歩本にそのまま引き継がれている。

「岡田が善意で投げた石が偶然にあたって雁は死んだ。岡田とお玉の愛の蕾も、雁の死のようにはかなく散ってしまうことを暗示しているようで、この作品を読む人の心にせまってくる場面である。不忍池におりてみた。池の一部がポート場になっている。蓮と葦におおわれていた明治の風景とは大きく変わっている。雁はいない。…人間的な自我の感情に目覚めながらも、偶然のいたずらも重なって、胸の想いを打ち明けることもできず、妾の境遇に生き続けなければならなかったお玉の哀れさを想いながら、私は不忍池から無縁坂にきびすを返した。暗い格子戸の奥から、ほの白いお玉のさびしげな顔が浮かんでくるようだった。」（電台台東文芸同好会、文献16、二一八―二一九）

「今、この無縁坂のあたりは、マンションが建ったりして、すっかり様子が変わってしまったが、旧岩崎邸―今の司法研修所―の樹木の生い茂っているところだけは、この小説に描かれている当時と、そう変わっていない。…なんとなく、薄暗い町の感じからは、この小説のふんいきを、少しはしのぶことができると思う。…この作品は、無縁坂に住む、古い型の若い女性―お玉―の自我の目覚めを描いた小説である。…また、この小説で、作者の森鷗外は人生には偶然というものがよくあって、その偶然から、また別な人生の道が開かれることも多いものだ、といったかたのである。お玉の自我が、ついに目覚めることなく終わったのも、ふとした偶然からで、また、このあとに描かれている―不忍池の雁が生命をおとした―のもまた、ふとした偶然であった。」（大竹新助、文献20、三七―四〇）

そこには、野田の提示した無縁坂の表象が、多少のヴァリエーションを伴いながら繰り返し現れてくることによって、人々

のこの場所の記憶に定着してゆくさまをみるができるだろう。

小説の舞台になっっている場所を現実に見聞することによって、そのコンテキストが、小説というテキストをよりリアルで充実した形で体験することを可能にしている一方で、その舞台になった場所というテキストの方もまた、小説に描かれた情景やそれに対する解釈がコンテキストとして重ね合わされることによって、奥行きや重層性を伴って立ち現れてくることになる。文学散歩はまさにそのような形で現実の場所と小説とを媒介する装置となっているのである。ただ、野田の場合、そこにまとわされてくるコンテキストは、いささか情緒的なものに偏しているように思われる。不忍池と無縁坂を結びつけているのは、一羽の雁がお玉の運命を象徴しているという関係であり、岩崎邸の鬱蒼とした木立のもたらす薄暗さもまた、お玉の生活のありようを象徴的に映し出すようなものとして位置づけられている。その意味では、この小説が無縁坂という場所にまとわせるのはもっぱらそのような情緒であり、それが小説の味わいと響きあいながら、われわれの体験を豊かにしているという関係をそこに見ることができよう。

### 三 前田愛の『幻景の街』

それに対して、一九八〇年代にはいると、無縁坂の表象はそれとは違った様相をみせはじめることになる。新しい動きをもたらししたのは、国文学者・前田愛の著書『幻景の街』（文献21）であった。

一九八〇年から小学館のPR誌『本の窓』に連載されたものだが、前田自身はこの本の「あとがき」で、「テキストとしての都市から切り出されたメタテキストないしはサブテキストとしての文学を考察した『都市空間のなかの文学』が理論編であるとすれば、この『幻景の街』はそれに対する実践編である」と述べている。また、文学散歩の創始者である野田のこにも触れ、「野田氏の文学散歩は、作家の生誕地や育った環境を足で歩いて探索するところに興味の中心がおかれていた」

のに対し、『幻景の街』は、むしろ作品のなかに描かれた都市を復原して行くところに狙いがある」とも述べている(二六八)。

前田のこのような姿勢によって、『雁』の読みにも、そこに描かれた無縁坂の表象にも新しい局面がもたらされる。前田の文学散歩の武器となるのは、作品に設定されている年代当時の現場の地図である。前田は鷗外自身が「東京方眼図」と題された地図の編纂者になっていることを挙げ、鷗外が小説の中でいかに鋭敏な地理感覚をもって東京を描き出しているかを述べた上で、明治一〇年代につくられた参謀本部陸軍測量局の「五千分一東京図」を持ち出し、『雁』に描かれている岡田の毎日の散歩コースをそこに書き込むことからは始めている。お玉の家のあったあたりについては、以下のような記述がある。

「『五千分一東京図』では、岩崎の邸は「累石牆」のうえに「鉄柵」をめぐらしているように見える。無縁坂の北側には都合九件の民家があり、やや奥まったところには講安寺の一風変わった土蔵造りの本堂が、網目の記号で木造の民家と区別されている。ルーペで覗き込むと、この九件の民家が《雁》の描写どおりにそれぞれの表情をもって浮き上がってくるように錯覚される。「格子戸を綺麗に拭き入れ」たお玉の家は、坂の上から数えて三軒目の家屋が宛てられるかもしれない」(二六八)

このように前田は当時の地図を参照することによって、小説の背景にある都市の全貌を明らかにし、その中にあらためて登場人物や彼らの織りなすできごとをプロットしてゆくのだが、そこから浮かび上がってくるのは、無縁坂という場所が、お玉をかこっている高利貸の末造が池之端にもっている自宅、蓮玉庵近くの家、下谷竜泉寺町の事務所といった末造の築き上げた「小さな王国」に岡田の散歩コースがふれあうポイントになっているという構図である。開化の世相から取り残されてしまったような、この前近代的な王国にからめとられていたお玉が、岡田との出会いをきっかけに、この王国の外の世界に

魅かれていくという構図には、自我の目覚めという言葉には括りきれない何かが現れていると前田は言う。

「末造の「小さな王国」が罅割れはじめた兆候から、私は地縁や血縁でかたく結ばれていた下町的な世界の上に押し入ってきた〈近代〉を読み取りたいと思うものだ：一方には末造夫婦やお玉父娘が生活の根を下ろしている下町の淀んだ世界があり、もう一方には、散歩の道筋にそってあらわれる下町の町並を、ただ風景としてやりすこす明治のエリートたち、「僕」や岡田の世界がある。待ち続ける女と通り過ぎて行く男―お玉と岡田の出逢いの意味をそこまで煮詰めてみると、《雁》のなかにこのうえない精密さで復原された明治十年代の東京の町並もまた、二つの位相に切り分けられていることがのみこめてくるだろう。暮れなずむ坂の途中に立ちつくして、岡田の後ろ姿を見つめつづけていたお玉のまなざしは、〈近代〉の闕からへだてられてしまった無縁坂の怪しい街並のまなざしそのものである。」

(三〇―三二)

前田が当時の地図を手がかりに読み解いた、当時の東京という都市をおりなす二つの文化圏の關係の中に置いてみることによって、岡田とお玉をめぐる物語やそこでの出来事に新たな解釈の可能性が開かれたこともさることながら、そのことによって同時に、東京という都市自体のあり方やその中の無縁坂という土地の景観についても新たな視点もたらされたことが重要である。二つの文化圏のせめぎあう場所としての無縁坂、そういう位置づけのもとにみることによって、ただの平凡な坂にしかみえない無縁坂の中に歴史的な奥行きや文化的な広がりを見るようになる、文学作品というフィルターを通すことによって、最も印象的な形でそのような事態を体験することを可能にするのが文学散歩という場であること、『幻景の街』はそのことを見事にわれわれに示してくれたのである。

前田の開いた文学研究のこのような新しい方向性は、文学研究の領域でもいろいろな形で展開をみせた。前田がこの連

載をはじめた一九八〇年六月の雑誌『国文学解釈と鑑賞』は「文学空間としての都市」という特集を組んでおり、助川徳是の「無縁坂と《雁》」という論考も掲載されているが（文献19）、前田による文学研究のオペルニクスの転回ともいふべき斬新な視点についてゆくことができなかったとみえて、与えられた論題にこの著者はいさか当惑気味である。少し後の一九九一年には雑誌『国文学』が「近代文学東京地図」という臨時増刊号を出しており、千葉俊二の担当した無縁坂に関する記述には「《雁》という作品は、結局山の手と下町との境界を越境して歩く医科大生岡田と、子ども相手に鉛細工の屋台をひく爺さんの娘で、岡田へ思いを托すことによって下町から山の手への上昇を夢みたお玉との接近と乖離という坂のもつドラマであったとはいえないか」と書かれているが（文献22、七三）、この記述が前田の見方を基本的に踏襲していることは明白である。

『幻景の街』の影響力の大きさは、多くの文学散歩のガイド本の中にそこでの観点が取り入れられるようになることに如実にあらわれている。鷗外の作品が取り上げられる時に、前田が引き合いに出した鷗外編の「東京方眼図」が言及されるというパターンがみられるようになる傾向も顕著で、坂崎重盛の『一葉からはじめる東京町歩き』（文献35）などはこの東京方眼図を綴じ込み付録としてつけているほどなのだが、無縁坂自体の記述にも前田の影響は如実にあらわれている。

「筋だけでは単なるすれ違いの恋の話である。だが主人公のそれぞれ置かれた立場は当時の越えがたい階層の象徴でもある。岡田の属する明治の近代日本の知識世界のエリートと、お玉の庶民の側それも困われ者という境遇は、男と女の溝以上に深いものであった。その象徴ともいえるのが舞台となった無縁坂である。本郷台地の高台と池之端を結ぶ坂は、山の手と下町を結ぶ道でもある。江戸から東京へ変わった明治という時代に生まれた山の手文化、昔からの情緒をそのまま残す下町文化は、関東大震災や戦災に遭うまでの東京でははっきりと地域によって違っていた。そうした対比は、この作品のあちこちに描かれていて興味深い。」（近藤富枝他、文献27、六三）

「無縁坂は山の手と下町を結ぶ坂。岡田は山の手に住む近代日本の知識エリート、お玉は下町の庶民、所詮結ばれない階級であった。無縁の関係であった。」（青木登、文献31、五二）

「彼は毎日大学の医学生―末は博士か大臣かという野心家たちに囲まれ、中には豪遊している輩もいたに違いない。それが無縁坂の坂上の世界で、その刺激から発憤努力して得た中坂の妾宅は末造に象徴される庶民の手に届く最高の悦楽であった。…お玉がやっと自我に目覚め、その行動に出たとき運命に突き放される。突き放したのは岡田である。…彼もまた坂上の住人であった。」（井上謙、文献32、二〇三―二〇四）

これらはいずれも、前田が浮き彫りにした東京の二つの文化圏の対立構造をふまえ、その両者を結ぶ場所として無縁坂を捉えているものだが、下町の対立項として、前田が使っていないような「山の手」という言い方を出してきたり、その両者を結ぶ存在としての「坂」の表象を東京の坂一般にまで広げるなど、《雁》という作品や無縁坂という特定の場所をこえて、東京という都市全体の表象に関わる要素がさらに明瞭になってきていることがみてとれる。そして、そのことはこの問題は、狭い意味での《雁》をめぐる言説をこえて、この地域全体の表象に関わる様々な言説との関わりの中で捉えるべき必要があることを示唆しているともいえるのである。

#### 四 司馬遼太郎の「本郷界限」

その点で忘れることのできないのは、司馬遼太郎が一九九二年に「街道をゆく」シリーズの一冊として書いた『本郷界限』（文献23）である。この本には「無縁坂」と題した節もあり、鷗外の履歴を語りながら、鷗外の学生時代の周辺環境を描

き出したドキュメントとして《雁》が取り上げられている。そこでも、無縁坂の反対側にある岩崎邸の塀についての蘊蓄が傾けられているが、重要なことは、この「岩崎邸」を主題的に扱った節が「無縁坂」の節の次に置かれており、そちらとの関連で読むと、無縁坂の部分の記述もこれまででない広がりを含んだものとしてみえてくるということである。

この本には、他にも本郷周辺に点在する夏目漱石、坪内逍遙、樋口一葉などのゆかりの場所をたずねる記述が多数含まれてはいるが、もとより文学史や文学散歩の本ではない。司馬の設定した中心主題は、明治初期にお雇い外国人やエリートたちが集まり、欧米文明を一手に受け入れ、地方に分配する「配電盤」の役割を果たしたこの地域の特殊なありようを描き出し、今に残るその跡をたずねることを通して、日本の「近代」を問うことにあつたのであり、鷗外をはじめとする文学者たちも、そのような大きな文化配置のうちに捉えられている。

お雇い外国人ジョサイア・コンドルの設計になる岩崎邸は、「明治国家の勃興を見、その没落も見、敗戦後の荒みまでも見」た象徴的な存在として描き出されているが（二二二）、この場所は江戸時代には榊原家の藩邸であり、維新直後には西郷隆盛をかついで西南戦争をおこした桐野利秋が住んでいたこともあるという。そういう経過を経て岩崎財閥の所有となったこの土地の鬱蒼とした木立が、一本の道路を挟んで近代から取り残されたような仕舞た屋と対峙する無縁坂の寂しい景観は、このような文化配置の中に置き直してみると、様々な感興を呼び起こすことになるだろう。最近のガイド本等ではとみにこうした司馬の視点の影響が強まっており、無縁坂の表象もそのような方向性を強めているように感じられる。

二〇〇二年刊行の『本郷界隈を歩く』（文献33）での無縁坂の記述には、

「お玉の家の向かい側、坂の南側といえば、この敷地はその昔、徳川家康の四天王、榊原康政の屋敷跡であり、幕末まで越後高田一五万石の中屋敷、明治になって桐野利秋の邸宅となり、桐野が西郷とともに鹿児島に帰ると、その後は三菱の初代岩崎弥太郎の本邸となっている。そして最近まで、最高裁判所司法研修所であった。この敷地の変遷がなんと

も興味深く、歴史が匂ってくる感じさえする。…ともかく現在では、《雁》時代の雰囲気は、この坂の石垣の側から漂っていることは間違いない」（一三三十一—一三三三）

との一節がある。これが司馬の記述をほぼベースにしていることは間違いないが、無縁坂の景観は「配電盤」としての本郷の名残を残す数少ないものに姿貌し、そのような文化配置との関わりの中で、この地に残る《雁》の物語の余韻もまた別の風情を漂わせてくることになるのである。

本郷界限が司馬の『街道をゆく』シリーズに取り上げられたことは、単なる一冊の本をはるかにこえる影響力を行使することとなった。この人気シリーズを題材にしたテレビ番組やムック本などが次々と作られたからである。NHKでは一九九七年から翌年にかけて『NHKスペシャル』の枠内で、司馬の著作をベースにした『街道をゆく』シリーズ六作を制作したが、その後さらに別のシリーズの形をとりながら、あわせて三六作を放映した。「本郷界限」は最初のシリーズの第六回として、一九九八年三月八日に放映されたが、同年には、この番組の制作スタッフの手でこの番組の取材記をもとにした『司馬遼太郎の風景』なる四冊本のシリーズが出版され、「本郷界限」もその第四巻に収録された（文献29）。また二〇〇五年には朝日新聞社が『週刊 司馬遼太郎 街道をゆく』と題された、全五〇巻からなるビジュアル中心の週刊ムック本シリーズを刊行し、「本郷界限」もその第一二巻として出版されている（文献38）。

これらはもちろん、文学散歩本ではないから、文学が中心テーマになっているわけではないし、NHKの番組には無縁坂そのものが登場していない。しかしながら、これらのいわば司馬遼太郎に寄生する形で作られたものにあつては、「文明の配電盤」というキーワードを軸にした「司馬ワールド」が、原書からの引用を効果的に使いながらより強調された形で提示され、「近代」を象徴する本郷という特殊な地域と、その周縁にある地域との対比が際だたせられる傾向が強められている。番組は、ちょうど前年に行われた東大の一二〇周年展と岩崎邸を中心に示される本郷の「近代」世界に、菊坂の庶民の下町

的な暮らしが対比され、周辺の坂を上り下りしながら、そのあたりに住んだ漱石、逍遙、一葉らをその文化配置の中に位置づけてゆく構成になっている。鷗外や無縁坂は直接には登場しないが、こうした全体像をふまえるならば、そのアナロジーで捉えることは容易である。ムック本の方も、冒頭に掲げられた「明治後、東京そのものが、配電盤の役割を果たした」という司馬の引用が全体を統一するモチーフとなっており、そのベースの上に無縁坂も断片的ではあるが何度か登場する。「成田龍一がゆく本郷界限」(二〇―三)は、近代史研究家の成田が周辺の見学モデルコースを案内する記事だが、最初に東大を出発し、無縁坂を通過して岩崎邸に向かう設定になっている。また、本郷界限の登場人物としての森鷗外を紹介する日本文学者・紅野謙介による「森鷗外 本郷界限の坂道を巧みに織り込む」という見出しの付けられた記事には、鷗外自身が東京方眼図を考案したと、無縁坂を舞台に《雁》を書いたというおなじみの話が紹介され、「高低を結びあわせ、風景を一変させる坂道。切断と接続という、相反する作用を浮き上がらせた坂道こそ、鷗外の小説にふさわしい空間だったのでろう」(一五)と締めくくられている。

ある意味では前田以来、繰り返して語られてきた話の焼き直しだが、日本近代の文化配置を読み解くというさらに大きなコンテキストの中で再解釈されることによって、もはや文学作品の解釈や文学散歩という枠をこえて、本郷の全体的な地域表象の中での位置を占めるものになっているということができるだろう。もっとも、司馬が帝大を中心とする本郷界限を「配電盤」という卓抜な比喻で呼び、それがこうした表象を広めるきっかけを作ったことは事実であるにせよ、あらためて司馬自身のテキストを見直してみると、必ずしもそのようなステレオタイプの議論に終始しているわけではない。司馬独特の「脱線」の多い文章の中では、岩崎邸に関しても、その後人手に渡り、敗戦後には進駐軍に接収され、そこに住んだ進駐軍の軍人が延内でピストルの試し撃ちをしたらしき後が今も邸内に残っている話が披露されるなど、この邸が人手に渡って転々とすることによってたどった数奇な運命が語られており、「配電盤」的な色彩一色というわけでは決してない。全国に西洋文化を送り出したエリート之地としての本郷、というイメージが前面に出るようになったのは、司馬の本自体というよりは、

司馬のこの「配電盤」イメージに寄生しつつそれをさらに強調された形で広めた、NHKの番組やムック本を通してであったとみたほうがよい。

NHKの番組では、ちょうどこの放映の年に行われた東京大学創立一二〇周年記念の展覧会の様子が映し出され、その展示品であった、西洋直輸入の初期の様々な実験器具やら、夏目漱石の名が記された卒業生名簿やら、首席卒業者に与えられた恩賜の銀時計やら、本郷台地上で展開されていたエリートたちの世界の様子が様々な形で映し出され、台地下の菊坂周辺の下町風の暮らしが対比される構成になっている。岩崎邸もまた、この一二〇周年展の一環として行われたお雇い外国人に関わる展覧会が紹介され、そこに展示されていた設計者コンドルの存在をつなぎ目として、帝大のエリートたちの世界に直接接続させる形で位置づけられている。この一二〇周年記念展は、もちろん司馬の言う本郷の「配電盤」的なあり方を象徴的に示すものではあったろうが、すでに司馬の他界していたこの時期に行われた展覧会を梃子として、司馬の描いた多様な世界のある一面をことさら強調するような方向性の動きが生じたことは間違いない。とりわけこれらのケースでは、映像、写真等のメディアが効果的に用いられることによって、こうした地域表象のある一面が、視覚的なインパクトを伴って、強烈な形で人々の記憶に焼き付けられてゆくことになったのである。

最近では、狭い意味での「文学散歩」をこえて、この地域の町歩きを楽しむ人が多く、地下鉄の本郷三丁目駅周辺では、ここでとりあげたようなガイドブックを手にした人々の姿を見かけることも多い。東京大学では法人化後の新しい試みとして、大学内のキャンパスツアーを開始し、いつもにぎわいをみせている。大学内のキャンパスツアーに来る人々にはもちろん、司馬遼太郎も近代も関係なく、ただ東大の中を見られるという好奇心から来ているだけの人も少なくないだろうが、そういう体験を通じて、「配電盤」としての帝国大学が作ってきた歴史を認識し、それとの関わりで東京という都市を捉えるような視線を持つ人々が増えてくることは間違いないだろう。そういう人々はあるいは、帰りがけに通る無縁坂が、それまでとは全く違った相貌のもとにみえてくるような体験をすることになるかもしれない。無縁坂の光景も、またそこを舞台上に

した鷗外の小説も、つねにそういう連関の中におかれながら認識され、解釈されるのである。

ここまでみてきた限りでは、前田ら、卓越した《雁》の解釈者たちの言説によってひらかれた視点が、文学散歩の広がりに乗って広く伝播され、共有された視点になってゆくという傾向が濃厚だが、そういうことばかりではない。

## 五 さだまさしの《無縁坂》

無縁坂の表象と結びつく芸術作品は《雁》だけではない。同じ場所を舞台に複数の文学作品が書かれるケースも当然あり得るし、文学だけでなく、絵画、映画、写真、音楽など、様々なジャンルの作品が複合的に重なり合いつつその場所の表象を作り上げ、それがまた個々の作品に投げ返されるというインターテクスチュアルなモデルを考えることが必要だろう。そういう点から言うと無縁坂に関しても、一九七五年にさだまさし（当時は「グレイプ」というユニット名）のうたった《無縁坂》という歌の存在を無視することはできない。森まゆみの『鷗外の坂』にも、訪れた講安寺の住職が「いまや、お玉さんの《雁》よりも、さだまさしの作詞作曲した《無縁坂》の方で訪ねてくる人が多いんですよ」と笑った、というくだりがあるが（文献28、三〇九）、無縁坂に関わる記憶を考える上で、このような人々の存在を無視することはできない。彼らの多くは《雁》のことを知らないであろうと思われるし、そもそも、この曲に登場する「無縁坂」が本当にこの実在の無縁坂を指しているのかどうかすら定かではないことを考えるならば、これらは相互に関連のない別々の動きであるようにもみえるが、必ずしもそういうわけでもない。文学散歩本には、この歌の舞台としての無縁坂を取り上げているものは多くはないが、それでもその影響は決して無視できない。

NHKの「街道をゆく」の制作スタッフが作った『司馬遼太郎の風景』では、岩崎邸の記述の冒頭に「『忍ぶ忍はず無縁坂』とさだまさしが歌った無縁坂は、不忍池に向かって落ち込んでいる。坂に沿って延びる重厚な石垣の壁が目を引き。しかし、

高い壁とうっそうと茂る樹木のため、中の様子はまったく窺い知ることができない」という一節が置かれている（文献29、一五五）。NHKのスタッフが《雁》との関連をどのくらい意識していたのかはわからないが、ここではこの歌に、「配電盤」としての本郷台地と不忍池界限の下町との対比を象徴的に示す役割を担わせる結果になっている。

すでに取り上げた二〇〇三年刊行の『るるぶ』には「東京の坂 歌のテーマになった坂」というイラスト入りの特集があり（文献34、九八―九九）、そこで無縁坂も取り上げられている。「本郷方面から不忍池へ下ってゆくこの坂は、森鷗外の作品《雁》の主人公岡田の散歩道ということで知られていた。坂の南側は古びた石垣と赤レンガの塀が続き、さだまさしの歌のように叙情的な風景がまだ残っている」と書かれている。またすでにみた『本郷界限を歩く』（文献33）の最初の節につけられた見出し「忍ぶ不忍無縁坂」はこの歌の歌詞である。一般に、狭義の文学散歩本というよりは、このような一般向けのガイドブック的な性格の強いものであればあるほど、さだまさしの歌の影が強まっていることがみてとれる。

富田均の『東京坂道散歩』（文献39）の無縁坂に関する記述では、このさだまさしの歌との関係が前景化している。無縁坂を訪れ、高層マンションが立ち並び、風情のなくなった風景に失望した著者は、坂を下りて余所へ移動しかけた時、さだまさしの《無縁坂》の歌詞が頭に浮かんだという。

「坂に戻り、歌の中の母のことを考えた。『この坂を登るたびいつもため息をついた』と歌われている。それほど険しい坂ではない。病身だったのかと思った。無縁坂の道は東大病院に続いている。何となく坂の上に住む母と子の話として聞いていたが病院通いの歌だった可能性もある……。急に歌の通りの母子を探してみたが、そう都合よくは現れない。替わりに自転車前の部分に子供を乗せ、その頭上で煙草に火をつける母親を見た。時代が変わった。《無縁坂》の母は我が子にあまるほどの優しさと正しさをそそぐ母だった。」（一五六―一五七）

東大病院にやってきたという推測が当たっているか否かはともかくとして、病弱で貧乏な母親がこの坂を登って東大病院に行くという表象は、お玉のイメージと響き合うとともに、病院通いをしている貧しく病弱な親子という新しい種類の登場人物を呼び込む。この両者が重ね合わせられることによって、『無縁坂』という歌の解釈にも新しい局面がひらかれようし、それはまた、この場所の表象をさらに重層的にしてゆくであろう。文学という枠をこえて、さまざまな芸術作品のメディア横断的な関わり合いの中から新しい表象が生み出され、それがまたそれぞれの作品に返されてゆくというダイナミックな関係がそこには成り立っている。文学散歩はまさにそのような場を提供する核となる場なのである。

## 六 東京の坂への新たなまなざし

最後に、近年生じている、東京の坂に対する新しい見方、楽しみ方の急速な広がりについて触れておきたい。二〇〇〇年前後から、東京の坂を取り上げた本の出版が急増している。すでに取り上げた富田均の『東京坂道散歩』（文献39）は二〇〇三年から三年間にわたる東京新聞の連載記事をまとめたものだが、同じ二〇〇三年からほぼ並行する形で、朝日新聞には山野勝が『江戸の坂』という連載記事を書いており、やはり単行本化されている（文献40）。もちろん、東京の坂や坂道に對する関心は、べつに今になってはじめて生まれたというものではない。古くは一九七〇年に刊行された横関英一の『江戸の坂 東京の坂』（文献13）あたりから、坂は東京という都市のあり方の特徴付けるものとして注目され、東京の坂をテーマにした論考がいろいろ書かれてきた。多くは都内に数多く残されている坂の名前の由来をたずね、それを手掛かりに江戸期以来のそれぞれの場所の歴史を描き出すようなものであるが、文学論においても特権的な位置を占めてきたことは、すでに述べてきた通りである。当初は作品の風情、雰囲気を醸し出す存在として、そして前田愛の『幻景の街』や司馬遼太郎の『街道をゆく』以後は、作品の骨格をなす東京の二つの世界を結び合わせる装置として、欠かすことのできない位置づけを

与えられてきたが、とりわけ文学散歩などの営みを通じて、そのようにして形作られた表象が、現実の坂に関わる言説にも反映され、それがまた東京という都市の風情を生み出すものとしての坂の地位を高めることにもなってきた。そのような形での坂の位置づけ方は連続と生き続けており、二〇一四年に刊行された『東京の「坂」と文学』（文献番号48）なども、そのような系譜の中に位置づけることができよう。

他方で近年になって、東京の坂についてのこれまでにない視野をもった言説が広がりはじめていることも無視できない。そのような方向の動きを代表的な形で示しているのが『プラタモリ』というテレビ番組である。タレントのタモリがアシスタントの女子アナとともに街を歩く番組だが、とりわけタモリが反応するポイントの一つが土地の高低であり、その結果、坂は彼の最大の関心事の一つとなっている。タモリは「日本坂道学会副会長」を名乗り、二〇〇四年に『タモリのTOKYO坂道美学入門』なる本を出している（文献37）。この本では、東京都内の四〇ほどの坂が取り上げられているが、それぞれの坂について「坂道実力診断」と称する五段階評価が行われており、これがおもしろい。四つの評価項目があるのだが、坂道をめぐるこれまでの言説で常に中心的なテーマであった江戸時代からの歴史や情緒にかかわる「江戸情緒」、「由緒」という項目とならんで「勾配」、「湾曲」という項目が設定されているのである。この本では「美しい湾曲」、「緩急あわせた勾配のバランスの妙」など、いかにも純粋な形の美しさに重きをおいているような書き方が目立つが、『プラタモリ』などで現地での彼のふるまいをみてみれば、そのような関心が、こうした微妙な勾配や湾曲などをもつ地形が生み出された過程や背景への関心と分かちがたく結びついていることがよくわかる。たとえば、以前には川が流れていたところが暗渠化されることによって残された道路の微妙な湾曲や、河岸段丘や砂州の名残をのこすわずかな上り勾配に反応する、といった具合である。

こうした傾向は、決してタモリの個人的な嗜好や性向を示すものではない。ここ数年、東京という都市への関心が高まり、東京論の本が次々出ているが、そのうちのかなり多くのものが、こうした微地形への関心を示している。二〇〇六年出版の

『地べたで再発見！ 東京の凸凹地図』（文献41）をはじめ、『凹凸を楽しむ東京「スリバチ」地形散歩』（文献45）、『地形を楽しむ東京「暗渠」散歩』（文献46）等々、柳の下のドジョウを狙ったような亜流本なども含めれば、優にそれだけで書店の特設コーナーを作れるくらいの数の本が出ている。このような地形への関心は、江戸期の町をはるかにこえて、太古の痕跡を探し、その姿を浮かび上がらせようとする志向に根ざしているような面もあるかもしれないが、鉄道廃線跡の微妙な湾曲を見つけ出すというような要素も含んでいることを考えれば、ここはむしろ、路上観察的の心性をめぐって藤森照信が「空間派」に対置させる形で「物件派」と呼んだような心性に近いものがあるように思われる。そこで東京という都市の表層から読み取られるのは、山の手下町といったマクロな構造ではなく、微細な痕跡の背後にひそむ様々な「事件」の匂いだったりするのである。

実を言うと、こうした微地形への関心もまた、今はじまったものではない。堀淳一の『地図のたのしみ』（堀 一九七二）が日本エッセイスト・クラブ賞を獲得し、「地図ブーム」の引き金を引いたのが一九七二年、それを受ける形で堀が中心となつて一九七九年に刊行がはじまった『地図の風景』（堀・山口・籠瀬 一九八〇、全二〇巻）は、「立体空中写真と地図とエッセイで綴る新日本風土記」と銘打たれているが、地図上の独特のカーブから鉄道廃線跡を見つけ出すようなメンタリティはすでにここにはっきりあらわれている。関東編Ⅰに収録された東京の部分では、河川争奪の跡を示す等々力溪谷や、谷と坂が複雑に入り組む本郷・弥生界隈といった、近年の凸凹マニアの「定番」スポットがすでに取り上げられているし、両眼視によって立体視することのできる空中写真は、二〇〇六年の『地べたで再発見！東京の凸凹地図』につけられた赤青のセロハン紙を使った3Dメガネのコンセプトをほとんど先取りしていたと言っても過言ではない。また、この微地形から東京を読み解いてゆくというコンセプトに建築家・槇文彦らがいち早く反応し、『見えがくれする都市―江戸から東京へ』（槇・若月・大野・高谷 一九八〇）という論集を編んだり、東京の地形の成り立ちを本格的に論じた貝塚爽平の『東京の自然史』（貝塚 一九六四）が増補改訂版として装いも新たに再刊されるなど、この一九八〇年前後の「地形ブーム」は、ほぼ今日



に細部の描写にこだわりをもつ鷗外のような作家ばかりではないから、地名を取り違えて平気で書いてしまう作家もあるだろうし、現実の都市とは似ても似つかないような要素が持ち込まれてくるようなケースも少なくないだろう。そのようなケースでは、作品は虚構として現実の都市とコンフリクトを起こしつつ、しかしながらその両者の接点で新たな場所の表象が生み出され、それがいつしか現実の都市自体を変えてゆくようなメカニズムを明らかにしてゆかなければならないだろう。しかしそのような場合でも、本論での考察は何某かのヒントを提供してくれるものであり得ると考えている。

無縁坂文学散歩関連文献（本文中では文献番号にて言及）

- 1 野田宇太郎 一九五一、『新東京文学散歩』、日本読書新聞（一九五一「日本読書新聞」連載）
- 2 野田宇太郎 一九五二、『新東京文学散歩』（増補訂正版）、角川文庫（1の改訂版、二〇一五講談社文芸文庫版）
- 3 野田宇太郎 一九五四、『アルバム東京文学散歩』、創元社
- 4 野田宇太郎 一九五四、『東京文学散歩の手帖』、的場書房
- 5 野田宇太郎監修 一九五五、『東京文学散歩 山の手篇』、角川写真文庫
- 6 槌田満文編著 一九五六、『文学東京案内』、緑地社
- 7 大竹新助 一九五七、『写真・文学散歩—本の中にある風景』、現代教養文庫
- 8 野田宇太郎 一九五九、『東京文学散歩 下町 中巻』、小山書房新社（『東京文学散歩』第三卷「三巻まで刊行」）
- 9 野田宇太郎 一九六二、『東京文学散歩 下町二』、雪華社（8の増補改訂版、『定本文学散歩全集』第三卷「全一二巻」）
- 10 野田宇太郎 一九六七、『日本文学の旅 東京下町（二）』、人物往来社（9の増補改訂版『日本文学の旅』第三卷「全一二巻」）

- 11 野田宇太郎 一九七〇、『掌篇文学散歩 東京篇』、毎日新聞社（一九六七—六九毎日新聞連載）
- 12 樋田満文 一九七〇、『東京文学地図』、都市出版社（6の増補改訂版）
- 13 横関英一 一九七〇、『江戸の坂 東京の坂』、有峰書店（一九七六増補改訂版、一九八一中公文庫版「上下二巻」、二〇一〇ちくま学芸文庫版）
- 14 石川悌二 一九七一、『東京の坂道―生きている江戸の歴史』、新人物往来社（朝日新聞連載）
- 15 江幡潤 一九七三、『文京の散歩道』、三交社
- 16 電台台東文芸同好会 一九七四、『下町の文学散歩―ふるさと東京再発見』、通信興業新聞社
- 17 樋田満文編 一九七八、『東京文学地名辞典』、東京堂書店
- 18 野田宇太郎 一九七九、『東京文学散歩 下町篇（下）』、文一総合出版（10の増補改訂版、『野田宇太郎文学散歩』第三巻「全二四巻、別巻四巻」未完）
- 19 助川徳是 一九八〇、『空間を軸とした新しい作品論 無縁坂と『雁』』、『国文学 解釈と鑑賞』六月号 特集「文学空間としての都市」、至文堂）
- 20 大竹新助 一九八二、『坂と文学（文学散歩シリーズ）』、地域教材社
- 21 前田愛 一九八六、『幻景の街―文学の都市を歩く』、小学館（一九八〇—八四『本の窓』連載、一九九一小学館ライブラリー版『文学の街―名作の舞台を歩く』、二〇〇六岩波現代文庫版
- 22 千葉俊二 一九九一、『都心の光と闇の地図』、『国文学』一二月臨時増刊号『近代文学東京地図 トポスとしての東京―近代文学を歩く』、学燈社）
- 23 司馬遼太郎 一九九二、『街道をゆく三七 本郷界限』、朝日新聞社（一九九一—九二朝日新聞連載、一九九六朝日文庫版）

- 24 東京都高等学校国語教育研究会編 一九九二、『東京文学散歩』、教育出版センター
- 25 関西文学散歩の会編 一九九三、『文学散歩 東京篇』、関西書院
- 26 森まゆみ 一九九三、「鷗外を歩く 心の水やり」、《『東京人』七月号 特集「漱石・鷗外の散歩道 本郷界隈」、都市出版》
- 27 近藤富枝監修・文芸散策の会編 一九九六、『文豪の愛した東京山の手』、JTBキャンブックス
- 28 森まゆみ 一九九七、『鷗外の坂』、新潮社（二〇〇〇新潮文庫版）
- 29 NHK「街道をゆく」プロジェクト 一九九八、『司馬遼太郎の風景 四 NHKスペシャル「長州路・肥薩のみち／本郷界隈」』、日本放送出版協会
- 30 三船康道監修 歴史・文化のまちづくり研究会編 一九九九、『歩いてみたい東京の坂（上）』、地人書館
- 31 青木登 二〇〇〇、『名作と歩く 東京下町・山の手』、のんぶる舎
- 32 井上謙 二〇〇一、『東京文学探訪 明治を見る、歩く（下）』、日本放送出版協会（NHKカルチャーアワー 文学と風土 ガイドブック、二〇〇二NHKライブラリー版）
- 33 『本郷界隈を歩く』二〇〇二、街と暮らし社（江戸・東京文庫⑧）
- 34 『るるぶ情報版 東京を歩こう』二〇〇三、JTB
- 35 坂崎重盛 二〇〇四、『一葉からはじめる東京町歩き』、実業之日本社
- 36 東京都高等学校国語教育研究会編 二〇〇四、『文学散歩 東京』、冬至書房
- 37 タモリ（日本坂道学会副会長）二〇〇四、『タモリのTOKYO坂道美学入門』、講談社（二〇〇三—〇四『TOKYO ★一週間』連載、二〇〇一一新訂版）
- 38 『本郷界隈』二〇〇五、朝日新聞社（朝日ビジュアルシリーズ 週刊 司馬遼太郎 街道をゆく No.12）

- 39 富田均 二〇〇六、『東京坂道散歩』、東京新聞出版局（二〇〇三—〇六東京新聞連載）
- 40 山野勝 二〇〇六、『江戸の坂（東京・歴史散歩ガイド）』、朝日新聞社（二〇〇三—〇六朝日新聞東京版連載、二〇一四朝日文庫版『大江戸坂道探訪』）
- 41 東京地図研究社 二〇〇六、『地べたで再発見！東京の凸凹地図』、技術評論社（地図が立体に見える3Dメガネ付き）
- 42 大石学 二〇〇七、『坂の町・江戸東京を歩く』、PHP新書
- 43 『東京ぶらり暗渠探検 消えた川をたどる』二〇一〇、洋泉社MOOK
- 44 山野勝（日本坂道学会会長）二〇一一、『江戸と東京の坂―決定版！古地図“今昔”散策』、日本文芸社
- 45 皆川典久 二〇一一、『凹凸を楽しむ東京「スリバチ」地形散歩』、洋泉社
- 46 本田創 二〇一二、『地形を楽しむ東京「暗渠」散歩』、洋泉社（43の増補改訂・単行本版）
- 47 今尾恵介監修 二〇一二、『東京凸凹地形案内』（太陽の地図帖〇一六）、平凡社（五メートルメッシュ・デジタル標高地形図で歩く）
- 48 原征男（坂学会会長）、瀧山幸伸（坂学会副会長）二〇一四、『東京の「坂」と文学―文士が描いた「坂」探訪』、彩流社

#### その他の文献

- Cohen, Sarah 1997, "Liverpool and the Beatles: Exploring Relations between Music and Place, Text and Context," in: David Schwarz et al. (eds.), *Keeping Score: Music, Disciplinary, Culture, Charlottesville and London*. University Press of Virginia, pp. 90-106.
- 青山霞村編 一九二六、『大正の東京と江戸』、学芸社
- 青山光太郎編著 一九三六、『大東京の魅力』、東京土産品協会

貝塚爽平 一九六四、『東京の自然史』、紀伊國屋新書（一九七九増補第二版）

小山利彦 二〇〇二、『野田宇太郎氏と文学散歩』、『国文学 解釈と鑑賞』二〇〇二年五月号（特集「古典文学の旅」）、一五〇—一五五頁

今和次郎編 一九二九、『新版大東京案内』、中央公論社

坂崎重盛 二〇〇一、『文学』を『散歩』した男、野田宇太郎、『東京人』二〇〇一年二月号（特集「新東京文学散歩」）、六二—六七頁

坂本浩 一九五九、『雁』の系譜、『国文学 解釈と鑑賞』一九五九年八月号、三七—四三頁

東京市編纂 一九〇七、『東京案内』下巻、東京市

堀淳一 一九七二、『地図のたのしみ』、河出書房新社（二〇一二新装版）

堀淳一・山口恵一郎・籠瀬良明 一九八〇、『地図の風景 関東編Ⅰ 東京・神奈川』、そして（立体空中写真と地図とエッ

セイで綴る新日本風土記）

前田愛 一九八二、『都市空間の中の文学』、筑摩書房（一九九二ちくま学芸文庫版）

楨文彦、若月幸敏、大野秀敏、高谷時彦 一九八〇、『見えがくれる都市—江戸から東京へ』、鹿島出版会（SD選書）

『文学散歩』 一九六一、「文学散歩友の会」機関誌、雪華社、一九六一年一月創刊（当初は月刊、第一号「一九六一年一月」より不定期刊、第二号「一九六六年九月」まで刊行を確認）

## 音源

《無縁坂》（NTV系放映ドラマ「ひまわりの詩」主題歌）、演奏：グレイプ（さだまさし）、ワナー・パイオニア・レコー

ド L—一〇九E、一九七五年

映像

『NHKスペシャル 司馬遼太郎 街道をゆく 第六回《本郷界限》』（放映：NHK総合テレビジョン、一九九八年三月八日、DVD：NHKソフトウェア、二〇〇四年）